

國學院大學學術情報リポジトリ

ジョージ・ブラウン・グードの博物館経営者としての業績

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 茂木, 香奈子, Moteki, Kanako メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000195

ジョージ・ブラウン・グードの 博物館経営者としての業績

茂木香奈子

はじめに

近代、日本の博物館創設に関わった人々は、欧米各地の博物館を参考にしようと海外視察を積極的に行い、それだけでなくゴッドフリード・ワグネルやデイビッド・マレーなど、欧米人の博物館に対する見解を取り入れてきた。したがって、日本の博物館創設には、欧米の博物館思想が深く関わっているといえよう。しかし、今日では、このような欧米の博物館思想に関する研究が少ないように思われる。日本における博物館の創成期を明らかにするためにも、欧米の博物館思想を研究する必要があると考えている。

ジョージ・ブラウン・グードは、日本の博物館創設に影響を与えた人物の一人である。19世紀後期、スミソニアンの学芸員及び経営者であったグードは、アメリカの国立博物館設立に大きく貢献した。現在、そのほとんどの施設をワシントンD.C.に置くスミソニアンは、世界最大の博物館群にまで成長している。グードの思想は、自国のみならず広く欧米各地の博物館界に影響を及ぼした。日本においても、それは例外ではない。グードの博物館論を日本に初めて紹介したのは棚橋源太郎だとされている⁽¹⁾。棚橋は、「博物館事業の大天才」としてグードの論文を紹介し、その多くの著書においてグードの記述を引用している⁽²⁾。

欧米のみならず日本の博物館にまで影響を与えたグードであるが、その業績や論文について詳しく考察した論文は、日本ではほとんど見られない。そこで本稿は、博物館経営者としてのグードの業績及び思想を論文や当時の国立博物館の記録から明らかにするとともに、その業績を再評価するものとする。そして、グードの活躍した時代から100年以上経った今日でもグードの博物館論から学べべきものがあるのかを考察する。

1. ジョージ・ブラウン・グードの生涯と時代背景

グードは、19世紀末のアメリカの博物館に多大なる影響を与えた人物である。その功績は、アメリカ近代博物館の父と呼ばれるに値する⁽³⁾。博物館での業績以外に当時のグードは、魚類学者として著名であったが、現代ではむしろアメリカ初の科学歴史家、科学のオーガナイザーとしてよく知られている⁽⁴⁾。したがって、グードは、博物館経営者のほかに生物学者、科学者、歴史学者といった多才な顔を持っている。

1-1. 人物像

1851年、グードは、インディアナ州ニューアルバーニに生まれた。父親が集めたスミソニアン⁽⁵⁾の報告書に夢中になるなど、小さい頃から科学に関心のあったグードであったが、大学に入るまでは学校に通わず家庭教師から勉強を教わっていた。1866年、ウェズリアン大学に入学することが決まったグードは、大学のあるコネチカット州ミドルタウンに引越し、4年間の大学生生活を送る。弱冠15歳で大学に飛び級入学したことからグードの聡明ぶりを窺うことができるが、大学の中では飛び抜けて優秀な生徒というわけではなかった。しかしながら自然史分野つまり自分の興味のある分野においては、一際有望視された人物であった⁽⁵⁾。大学を卒業後は、ハーバード大学院に入学し自然科学を学んだ。そして大学院卒業後、ウェズリアン大学博物館の学芸員に就任することが決まり、博物館でのキャリアがスタートするのである。

1872年、グードは、当時スミソニアンの国立博物館担当の副長官であったスペンサー・フラートン・ベアードに出会う。ベアードとの出会いは、グードの人生において大きな転機となる。最初の出会いから1年後、グードは、自身が論文を発表したアメリカ科学振興協会の会合において、魚類委員会の仕事に参加するようベアードから勧誘を受ける。ベアードは、能力ある若者を発掘することに長けた人物として知られており⁽⁶⁾、グードの熱意と才能に期待を抱いたのであろう。魚類委員会に参加してからのグードは、夏の間を大西洋海岸での調査研究に充て、冬の間を標本作りに充てるという生活を送った。この間、ウェズリアン大学博物館とスミソニアン⁽⁷⁾を行き来し、大学から給料をもらいつつボランティアで魚類委員会の調査研究に従事していた。スミソニアンとウェズリアン大学博物館の間で資料交換も行っていたようである⁽⁷⁾。1877年、グードはウェズリアン大学を離れて、国立博物館所属の学芸員補佐としてスミソニアンで正式に働き始める。その後、ベアードの長官昇格と同時に学芸員に昇進し、1879年には国立博物館副館長に就任、1887年には国立博物館担当の副長官に任命されている。

グードは、学生時代から生涯に渡って、数多くの論著を発表しており、生涯に

197の単著、152の共著、19の編著を残したとされている⁽⁸⁾。その数を見ただけで、いかに精力的な執筆活動を行っていたかを窺い知ることができる。専門分野である魚類などの生物学関連の論文のほか、科学の発展やアメリカの歴史に関する論文も数多く存在する。科学分野では、「アメリカの科学者と科学組織」(1887)「アメリカ科学の始まり」(1888)等を執筆している。歴史分野では、「アメリカにおける自然史の始まり」(1886)「アメリカの国立科学組織と教育組織の起源」(1890)などの論文のほか、スミソニアン半世紀に渡る歴史を綴った『スミソニアン 1846-1896』を執筆、編集している。また、博覧会関係の論文も多く、各博覧会におけるコレクションの分類体系や統計などを発表している。

グードは、国際的な博覧会においても多くの業績を残している。アメリカ独立100周年を記念して開催されたフィラデルフィア万国博覧会(1876年)、ベルリン(1880年)とロンドン(1883年)で開催された魚類博覧会、シカゴ万国博覧会(1893年)、マドリッドで開催された博覧会(1892~1893年)の展示製作者及び監督者として博覧会事業に参加している。また、ニュー・オリンズやシンシナティ、ルーイビル、アトランタなどの小規模の博覧会にも関わっており、博覧会の場においても惜しみなく博物館経営の手腕を活かしていた⁽⁹⁾。

利他的な精神で仕事に取り組み、いつでも他人の手助けに奮闘していたグードは、皆から愛され尊敬される存在であった⁽¹⁰⁾。グードの経歴を見ると、博物館での仕事に対して非常に献身的かつ意欲的な活動を行っていたことが窺える。その仕事ぶりのせい、または重度の喫煙依存のためか、グードは体調面での苦勞を少なからず抱えていた。1896年、グードは肺炎のために45歳の若さでこの世を去った。

1-2. 当時の博物館の実情

アメリカの博物館は、1773年チャールストン図書館協会によって設立された博物館に端を発する。当協会は、自分たちの属するサウスカロライナ州の自然史を明らかにするため、地方紙に資料を公募しそのコレクションをもとに博物館を創設した。その後の1786年、フィラデルフィアに設立されたピール博物館は、大衆に開かれた最初の博物館だとされている。しかし、19世紀の終わり頃まで、広く一般大衆に向けて資料を公開する博物館はほとんどなく、学会の会員などの限られた人々だけに個人的なコレクションを公開するところが多かった⁽¹¹⁾。

アメリカの博物館の抜本的な改革は、南北戦争によってもたらされた。南北戦争後の1870年代といえば、工業化や都市の拡大、株価の暴落、企業の不祥事、都市の貧困、非英語圏の移民増加、聖職者の廃退、政治汚職といった数多くの社会問題を抱えていた時代である。このような廃退的な社会の中で、各コミュニティの指導者たちは、人々の道徳観を促進するために、公立学校や博物館を活用しようとしたのである⁽¹²⁾。19世紀におけるアメリカの博物館の急速な発達ぶ

りは、社会現象とさえいえるほどであった。当初は、趣味同好者として集まっただけの人々が次第に一般大衆への啓蒙という使命のもと、各地域に地方学会を発足させることになる⁽¹³⁾。そして、地域の調査研究や文化振興といった活動の中心地、あるいは象徴の場としての博物館設立が強く望まれるようになり、その結果、町と博物館という組み合わせの定型化が進んだのである。アメリカでは、時代が下るにしたがい町の設立と博物館の開設との期間が短くなる傾向にあり、博物館が町の文化施設として不可欠なものになっていったことが理解できる⁽¹⁴⁾。その後も、大量移民の到来やフロンティアの消滅、貧困格差などの問題と向き合わなければならなかったアメリカの博物館は、アイデンティティの確立や異文化理解のために一般大衆に向けた教育活動を発展させていく。グードの活躍した時期は、このような博物館の変革期と重なっている。

19世紀のアメリカにおける博物館の展示は、一般大衆に対し所有者の権威や財力を示すよう構成されたヨーロッパの聖堂や宮殿の展示を参考にしていたため、所蔵するコレクション全てを展示することが主流であった⁽¹⁵⁾。これは、ヨーロッパにおいても同様の傾向であり、当時の研究者たちが理想とする博物館は、科学や技術、文化的な資料の莫大なコレクションを収集し解釈する場であった⁽¹⁶⁾。博物館が万物を所蔵し万物を解説する場として膨大な数の資料を展示することは、珍しいことではなかったのである。そのため、この時代の展示は、関連のない資料を雑然と配置する非体系的な展示が多かった。

2. 博物館に関する論文

1901年、グードの死を偲んで、グードの論文選集がスミソニアン年次報告書の特別号として刊行された。この巻末に、グードが生涯に執筆した論文目録が載せられている。当該目録を参考に、グードの博物館に関する論文を纏めたのが表1である。グードは、1870年代に博物館に関する論文を執筆しているものの、本格的に博物館関連の論文が多くなってきたのは経営者側である副館長に就任以降、1880年代に入ってからである。またグードは、表に纏めた論文以外に1881年から1896年までのスミソニアンの年次報告書において国立博物館の報告書を作成している。この年次報告書では、所蔵資料の内容や刊行された書物、職員人事、来館者の統計等の報告を行うとともに、学術的な論考を併記した年度が存在する。表1に挙げた論文とスミソニアン年次報告書を含めて、グードの博物館論を考える上で、より重要だと思われるものを以下取り上げることとする。

表1：グードの博物館に関する論文一覧

No.	発行年	論題	掲載誌名	備考
(1)	1871	Our Museum	College Argus, Vol. IV, March 22	ウェズリアン大学博物館の収集活動について論じたもの
(2)	1877	—	Fifth and Sixth Annual Reports of the Curators of the Museum of Wesleyan University, Including a History of the Museum from its Formation	ウェズリアン大学博物館の報告書
(3)	1878	—	Seventh Annual Reports of the Curators of the Museum of Wesleyan University, Including a Visitor's Guide to the Museum	ウェズリアン大学博物館の報告書
(4)	1879	The National Museum Building	Science News, Vol. I, April 1	工芸産業館完成以前のスミノニアンの国立博物館の成立史
(5)	1879	—	Eighth Annual Reports of the Curators of the Museum of Wesleyan University	ウェズリアン大学博物館の報告書
(6)	1881	Plan of Organization and Regulations	Proceedings of U. S. National Museum, Vol. IV (1882)	付録として掲載(本稿に詳細を記載)
(7)	1881	A Provisional Classification of the Food Collections	Proceedings of U. S. National Museum, Vol. IV (1882)	食べ物コレクションの整理と収集のためのリスト
(8)	1882	Outline of a Scheme of Museum Classification	Proceedings of U. S. National Museum, Vol. IV (1882)	資料整理の際に参考にするための臨時的な分類リスト
(9)	1885	The Smithsonian Institution	The Chauauquan, Volume V	ジェームズ・スミソンの歴史についての評述を含むスミノニアンの成立史
(10)	1886	The National Museum	The Chauauquan, Volume VI	公立博物館の歴史について概略を論じたもの
(11)	1889	Museum History and Museum of History	A Memorial of George Brown Goode (1901)	(本稿に詳細を記載)
(12)	1891	The Museum of the Future	A Memorial of George Brown Goode (1901)	(本稿に詳細を記載)
(13)	1893	The Genesis of the U. S. National Museum	A Memorial of George Brown Goode (1901)	アメリカに国立博物館ができるまでを綴った成立史
(14)	1894	Museum and Good Citizenship	Public Opinion, Volume XVIII, Number 31	(本稿に詳細を記載)
(15)	1895	The Principles of Museum Administration	A Memorial of George Brown Goode (1901)	(本稿に詳細を記載)
(16)	1895	—	An Account of the Smithsonian Institution, its Origin, History, Objects, and Achievements	スミノニアンの起源・歴史・資料・文書に関する報告書
(17)	1895	The Relationships and Responsibilities of Museum	Science, new series, Volume II	"The Principles of Museum Administration"の一部
(18)	1896	On the Classifications of Museums	Science, new series, Volume III	"The Principles of Museum Administration"の一部
(19)	1897	—	The Smithsonian Institution, 1846-1899. The History of its First Half Century	"The Founding of the Institution, 1835-1846"などの4編を担当

2-1-1. 「組織と規定の計画」(6)

1881年、グードは、スミソニアン職員に向けて「組織と規定の計画」(6)と題された文書を公布した⁽¹⁷⁾。これは、博物館業務上の規則や方法等を明記したものであるが、グードの博物館に対する見解が見られるものとして取り上げたい。グードが始めた職員向け文書の発行は、14年間定期的に続けられ、職員や寄贈者の手引きとなった⁽¹⁸⁾。そして、現代になっても国立博物館の基本的な組織構造や役割を反映したものと捉えられており⁽¹⁹⁾、グードの博物館経営者としての能力の高さを窺い知ることができる。グードはこの文書のほか、「食べ物コレクションの仮分類」(7)と「博物館における分類構想の概略」(8)を執筆している。

内容において注目すべき点は、ラベル(題簽)や展示設計についての具体的な方法が記されている点である。ラベルについては、それぞれの展示資料に(a)カタログ番号(b)名前(c)地域(d)入手元(e)解説の5つを印刷したラベルを付け、来館者の理解度を助長することとし、最適なラベルの大きさから材質にまで言及している。展示設計については、教育的根拠のない資料が展示されることはないとし、来館者の目の疲労を少なくするために展示の配置や光、色合いを工夫するよう注意を促している。また、それぞれの資料もしくは資料の集合体に、展示内容の簡単な記述、資料の起源や使われ方の説明、歴史の概要等の大きくて分かりやすいラベルを設け、展示ケースには概略的なラベルを設けることと記している。これは、ラベルとは別に、展示主旨の説明やより詳細な情報を伝達する際に用いられる解説パネルに通ずる技法と捉えられる。そして、写真やジオラマ、書籍、地図によって展示解説を補い、資料の情報を体系的かつ簡潔に纏めたガイドブックを発行することとし、ラベル以外の具体的な展示解説技術に言及している。

このように、グードの考える展示を設計する上での要点は、来館者目線に立つて来館者の理解を助長することにあつたと考えられる。

2-1-2. スミソニアン年次報告書(1881年度)

1881年のスミソニアン年次報告書に、グードが国立博物館副館長になってから初めての年次報告が記載されている⁽²⁰⁾。この中でグードは、博物館の歴史に関連付けて博物館のあるべき姿を論じている。

グードは、博物館の歴史を「保存のための博物館」「研究のための博物館」「教育のための博物館」の時期に区分し、近代の博物館は「教育のための博物館」に位置すると指摘している。「教育のための博物館」の起源は、来場者の教育のために産業資料を体系的に展示した1851年開催のロンドン万国博覧会であった。ところが、その後の産業界における国際的な博覧会は、商業的価値を重視する方向へと変わっていく。しかし、1876年にアメリカで開催されたフィラデルフィア万

国博覧会において、産業博物館における教育の重要性が明らかになったと記している。このフィラデルフィア万博は、スミソニアンがアメリカ政府の展示を一手に引き受けたものであり、動物と魚類の展示をグードが担当している。資料分類や展示設備などの新しい技法を試す場として博覧会を活用していたグードは、フィラデルフィア万博の展示製作の中で、印刷や色分けによるラベルの展示技術を実験的に取り入れていた⁽²¹⁾。

また、博物館は、「一つの一貫した計画に沿った設計のもと、あらゆる方面における人類の活動の成果と地球の資源を示すものとして構成されるべき」であるとし、人類の活動に関するコレクションは、「人類学」の博物館といった形をとるべきであると主張している。グードの考えたこの「人類学」とは、19世紀初期に主流であった未開の人々を対象としたものではなく、すべての人類を対象とした考え方である⁽²²⁾。したがって、グードは、「文明化した人々と未開の人々を合わせたあらゆる人々の身体的特徴や歴史、慣習、現在と過去を展示し、あらゆる時期の人類の文化と産業を解説する」博物館を理想としていた。対象分野を美術、考古、民族と限ることなく、あらゆる分野における人類と地球の資料を展示する総合的な博物館を目指していたのである。そして、ここ数年のスミソニアンの国立博物館は、世界中で最も広範囲かつ教育的な博物館であることは、ほとんど疑問の余地がないと断言し、自身の博物館を評価している。

さらに、グードは、博物館を「モノの諮問図書館」であるとしたイギリスの生物学者トマス・ヘンリー・ハクスリーの定義を引用し、以下のように続けている⁽²³⁾。

利用方法の分からない大多数の人々にとって、諮問図書館のような博物館の多くは、役に立っておらず、ほとんど教育的でもない。「教育博物館」は、学術的な大冊でいっぱい図書館よりも大衆向けの百科事典のようになるべきである。

グードは、これ以降の論文でも度々このハクスリーの定義を引用し、示唆に富んではいるが不十分な表現であると批評している。つまり、「モノの諮問図書館」という定義は、一般大衆への教育を目的とした博物館にとって最適な表現ではないと考えていたのである。

そして、有能な教育博物館は、良く選別された標本によって解説された教育的なラベルのコレクションを持つ博物館であると記しており、教育活動を行う上でのラベルの重要性を主張している。これに関連して、すべての公立博物館にて考慮されるべき展示設計の原則として以下の4つを挙げている⁽²⁴⁾。

(I) 展示されたすべてのモノの観念を解説すべきであり、全く同じ観念を持つ資料は二つとない。

(II) 解説の役割を果たすであろう、あらゆる資料の観念は、ラベルによって説明されるべきである。また、そのラベルは、資料に対する専門知識のな

来館者が、資料の展示理由やその資料が伝えようとする知識を学べるような方法で作成されるべきである。

(Ⅲ) 全般的な結論を導くために、来館者が認識するかもしれない資料同士の関係を慎重に分類しなければならない。そのために、資料を区別する個々のラベルと似たような方法で、資料の集合体の特徴や関連性を記述した包括的もしくは集団的なラベルを使用すべきである。

(Ⅳ) 体系的に整理されたラベルが示すすべての情報を含み、より重要な資料の印刷物を用いて解説された専門分野のためのガイドブックや小冊子は、個々のラベルやラベルの集合体を補完すべきである。

展示資料が内包する情報を提示するために一般大衆が理解しやすいラベルを個々の資料に付けるだけでなく、それぞれの資料の関連性を把握しやすいよう概略的なラベルを製作するべきであると指摘している。そして、解説の補助ツールとして、資料の絵図や資料の情報がすべて記載された書籍を刊行すべきであるとしている。これらの指摘は、先に挙げた「組織と規定の計画」(6)に記されていた展示設計と同じような見解であるが、こちらの方がより学術的な表現となっている。

ここに記されたグードの展示理論は、今日の博物館で一般的に実践されているものといえよう。例えば、ある展示室を特定時代のテーマに統一するために、冒頭に時代の概略を説明した解説文を設置し、ラベルに時代を併記するだけでなく、解説パネルでその時代の年表を紹介するといった総合的な展示演出を示唆している。また、グードの考えるガイドブックの役割も、今日の展覧会で制作される図録と同等のものである。

2-1-3. 「博物館と善良な市民」(14)

1894年に発表された「博物館と善良な市民」(14)には、博物館の公共性に對するグードの思想が要約されている⁽²⁵⁾。

まずグードは、一般的な知識の普及を行う機関は、大学を含めた学校・学会・図書館・博物館の4つであると明記している。これらの機関は、金銭的な利益を得ることなく社会に向けて教育的な事業を提供する、直接もしくは間接的な公的機関の管理下にあることが前提である。そして、これら機関は、知識の増大と普及を最も重要な目的とし、それぞれの特性を活かした活動を行っているとして記している。

その上で、博物館独自の機能は、人類の活動や自然現象を最もよく解説する資料を保存し、人々への啓蒙や文化のためにそれらを活用することであると指摘している。また、博物館は高い知識を持った人々のためのものでなく、文明の中心地だけで高い発展を成し遂げるものでもないとして記している。さらに、近代的な思考の成長においては、図書館よりも大衆に近い存在でなければならないとし、

すべての高度な文明化社会に公立博物館が必要であり、あらゆる国・州・市の文明化の度合いは、公立博物館の特徴によって示されると主張している。この指摘は、当時のアメリカ社会における博物館の立ち位置をよく表している。前述したとおり、19世紀のアメリカでは、町と博物館という定型化が進み、博物館は町の文化施設として不可欠なものになっていた。いわば、当時の人々にとって自分たちの地域に博物館があることは、町の発展ぶりを示す一種のステータスだったのである。

博物館は、社会的役割を果たすために以下の取り組みを効果的に行っていかなければならないと論じている⁽²⁶⁾。

- (1)公共文化と啓蒙のために：すべての資料にラベルの付いた魅力的かつ熟考された展示を通して、一般大衆のニーズに貢献すること。
- (2)学びの発展のために：資料や研究室、器具を調査研究のために使ってもらい、新しい知識をつくりだそうとしている学者を支援すること。
- (3)記録のために：将来、比較研究や批評研究を行うために、既に研究された資料や研究結果を修正・訂正・確認するのに役立つ資料を保存すること。
- (4)直接的な教育のために：教師が講義や教科書を使った授業で技術的な知識や高度な知識を説明するのを支援すること。
- (5)特別な情報を開示するために：費用をかけず組織の活動範囲を含めた、あらゆる分野の正確な情報を得るために、研究者や学生、学者といった臨時の調査協力者を支援すること。

あらゆる人々を対象とする博物館は、一般大衆だけでなく、学者や教師さらにはボランティアを含めた臨時職員を支援するべきであると指摘している。また、常に正確かつ新しい情報を提供するために、現在だけでなく将来を見据えた活動を行っていかなければならないと主張している。博物館の公共性に対する概念を列挙するだけでなく、誰をどのように支援すべきか具体的に記されている。

2-1-4. 「博物館の歴史と歴史博物館」(11)「未来の博物館」(12)

「博物館経営の原則」(15)

この3つは、世紀の変わり目頃の博物館論を代表する論文として位置づけられている⁽²⁷⁾。グードの博物館に対する見解は、一貫してこれまで見てきた論文と変わりはないが、この3つの論文はこれまでの所説を精巧に纏めたものであるといえる。

まず、「博物館の歴史と歴史博物館」(11)について論述することとする⁽²⁸⁾。グードは、論頭で、「博物館という言葉の本当の意味を最も正しく認識するには、その言葉の起源に先立つ時代に言及しなければならないだろう」と述べ、前半部分でギリシャ・ローマ時代からの博物館の歴史を辿っている。後半部分にて、異なる視点から博物館に対する見解を記している。

グードは、博物館のあり方について「人々の博物館は、ケースいっばいの標本の置き場所というだけではいけない。そこをたくさんアイディアが詰まった場所にすべきであり、整然とした体系に細心の注意を払ってアレンジしなければならない」と説き、人々のための博物館における展示のあり方について、以下のように述べている⁽²⁹⁾。

展示室での資料の提示に労を惜しんではならない。標本は、最も慎重かつ芸術的な方法で準備されなければならない。巧く作られたケースのはっきりと見えるガラスの向こう側に魅力的な形で配置しなければならない。資料の名前や歴史について十分に書かれたラベルをそれぞれの資料に付けなければならない。それらのラベルは、来館者の疑問になりそうなるすべての事柄についてあらかじめ言及したものでなければならない。参考になる文献は、使いやすい場所に置いておかななければならない。壁の色、ケース、ラベルは落ち着いた控えめなものにし、せいぜい疲れてしまった来館者のために快適な席を利用可能な所すべてに設置されなければならない。

展示の見やすさや分かりやすさ、展示室の雰囲気、来館者の疲労削減にまで言及し、あらゆる方面において利用者目線に立った展示設計が必要であることを説いている。また、「未来の博物館は高度な文化生活の主力の一つになるだろう」と指摘し、市民の生活のためにある博物館という未来像を掲げている。ここでも、近代社会における博物館の公共性について論じている。

続いて、グードは、研究と教育に関する具体的な展示設計について記している。グードは、すべての知的な活動が、調査研究や発見のための「知識の増大」と、人々への教育や資料価値の促進を目的とした事実を周知するための「知識の普及」に分けられるとした。その上で、博物館は、「知識の増大」と「知識の普及」双方を通して学びの発展に貢献しなければならないと指摘している。また、グード自身が働く国立博物館を事例として挙げ、実際にコレクションを2つに分類していると記している。一つは、人々の娯楽や教育のためになる補助用品を含めた一般大衆向けの教育的な展示用コレクションであり、もう一方は、専門家以外が滅多に調査しない科学研究所にあるような研究用コレクションである。グードは、実際に、展示の全体を簡単に把握できるような一般大衆向けの展示と専門家や研究者向けのより詳細な展示を区別して展示室を設計しており、グードが二重展示に関する見解を持っていたことが窺える⁽³⁰⁾。

さらに、図書資料や図書館についても言及している。図書資料の写真は、特定の概念を解説する際に標本よりも役立つことがあるため、様々なことを詳しく解説している図書資料を手放すべきではないと図書資料の重要性を主張している。また、良い図書館と密接な関係を築くことは、博物館にとって確実に不可欠なことであり、図書館側にとっても、基金の確保や大衆性の拡大において利益になるとしている。そして、図書館は読解能力のある人々にとっては最も役立つ施設で

あるが、博物館は教養の有無に関わらず教育活動の強力な誘因となるとして博物館の利用に制限がないことを主張している。この節では、このような博物館側の優越をやや強調するような記述がいくぶんか目立つ。しかし、グードは、「図書館と対立するつもりではない」と明記していることから、博物館の優位性を強調したいのではなく、あくまでも博物館における図書資料の重要性や図書館との相違点、双方における協力関係の必要性について主張していると考えられる。

そして、歴史博物館、歴史学者についても論じている。グードは、博物館は「歴史研究の推進において最も有効な手段となり得る」と指摘し、歴史学者たちに博物館資料の活用を勧めている。また科学博物館は、多くのことに挑戦しその中で実践可能な試みを見出してきたが、歴史博物館は、実験的な運営を未だ行わないままであると批評している。

次に、「未来の博物館」(12)を取り上げる⁽³¹⁾。グードは、論文の冒頭にことわざを引き合いに出し、当時の社会傾向について記している⁽³²⁾。

耳と目の距離は小さいが聞くことと見ることは大きく違うという東洋のことわざがある。私たち西洋の格言「見ることは知ること」は、より簡潔であり説得力にも劣らない。これは、人間の精神の中で強まりつつある傾向を表している。

この「強まりつつある傾向」とは、教師が講義を補強するために実物教授を行い、編集者が雑誌や新聞に精巧な版画を豊富に使用し、売人が鮮やかな図表を使って商品を宣伝するといった「見ること」を活用した試みが一般的になってきたことを示している。この「強まりつつある傾向」の中で、博物館は、「実物教授法による指導のあらゆる体制の中での最も強力かつ有益な補助機関としての適した立場を見出すべきである」として、実物教授における博物館の有用性を主張している。

これ以降は、「博物館の歴史と歴史博物館」(11)にて論じられていた博物館の歴史や公共性、図書資料の重要性、知識の増大と普及のための活動について同じように記されている。また、この論文にはその後の博物館学者たちによって頻繁に引用される文言が登場する⁽³³⁾。それは、以下の2つである⁽³⁴⁾。

過去の博物館は見限らなければならない。そして、骨董品の墓地から生きた思想の育つ場所へと再建し、一変させなければならない。

完成した博物館は死んだ博物館であり、死んだ博物館は無用の長物である。博物館を設立・維持するいずれの組織も、新たな収集を止めた時が博物館の朽ちる時だということをしっかりと念頭に置くべきである。

さらに、学びの施設としての役割を毎年示すことのできない博物館に、成長はなく尊敬されることもないとも述べており、あらゆる方面において生きた活動を行わない組織に博物館の永続がないことを説いている。

最後に、「博物館経営の原則」(15)についてみていく⁽³⁵⁾。この論文は、グー

ドの博物館論を最も体系的かつ具体的に表しているため、様々な論文の中で要約されている⁽³⁶⁾。この論文は、〈Ⅰ博物館と関係施設〉〈Ⅱ博物館の責務と必要なこと〉〈Ⅲ博物館経営における5つの要件〉〈Ⅳ博物館の分類〉〈Ⅴ標本とコレクションの利用〉〈Ⅵ博物館資料の保存と準備〉〈Ⅶ展示の設計技法〉〈Ⅷ記録・カタログ・標本ラベル〉〈Ⅸ展示ラベルとその機能〉〈Ⅹガイドと講義；ハンドブックと参考書〉〈Ⅺ将来の博物館の役割〉の11章に分かれている。さらに、各章ごとに3~11の節を設け、詳細な記述を行っている。

第Ⅰ章でグードは、先に挙げた論文「博物館と善良な市民」(14)の中で博物館独自の機能として述べられていた「人類の活動や自然現象を最もよく解説する資料を保存し、人々への啓蒙や文化のためにそれらを活用すること」を博物館の定義として採用している。続いて、第Ⅱ章では、それまで度々論じてきた博物館の公共性について、これまでよりさらに詳しく述べている。また、ラベルの相応しい文字、形、大きさについても第Ⅸ章においてこれまでより詳細な記述を設けている。さらに、同じく度々論じられてきた図書資料の活用についても第Ⅹ章にて、閲覧机や図書室を設置すべきとして具体的に論じられている。

2-2. 小結

以上、グードの博物館に関する論文の中から重要だと思われるものを取り上げてみた。これらを纏めてみると、全体的に何度も繰り返されている見解や主張を見出すことができる。

まず第1点は、博物館の歴史に対する認識である。前述したようにグードは、アメリカの歴史や科学の歴史を研究してきた歴史学者であったが、それと同時に博物館史の専門家であったともいえるであろう。表1の論文の内、(2)、(4)、(9)、(10)、(11)、(13)、(16)、(19)の実に8つが博物館の歴史に関するテーマであり、このほかにスミソニアン年次報告書や(12)の論文でも博物館の歴史を記していた。その内容は、スミソニアンやアメリカ国内の博物館成立史だけにとどまらず、世界全体を通じた博物館の起源について考察を重ねたものである。また、多くの論文において、歴史に言及した上で博物館に対する見解を述べていることから、「博物館という言葉の本当の意味を最も正しく認識するには、その言葉の起源に先立つ時代に言及しなければならない」という確固たる意志を持っていたと考えられる。

続く第2点は、博物館における教育機能の強化である。グードは、博物館が知識の普及を行うことの重要性を繰り返し主張してきたが、グードがどのような博物館教育を理想としていたのかは、スミソニアン年次報告書(1881年度)に記されていた「『教育博物館』は、学術的な大冊でいっばいの図書館よりも大衆向けの百科事典のようになるべきである」とする見解であると理解できよう。前述したようにグードは、ハクスリーの「モノの諮問図書館」という博物館の定義を不

十分だと捉えていた。図書館の資料を調べる際には一冊につき、一人ずつしか利用できない上に、長期的な集中力を要し、自分の求める答えを莫大な量の本から探し当てなければならない。かかる観点からグードは、図書館をあらゆる人々が利用する場所としては不向きであると考えていたのである。一方で、博物館の資料は、個々が示す意味だけでなく集合的にも意味を持つことから、体系的な順序をもとにしたグループとして大衆的な視点で展示されているとグードは記している。つまり、グードの理想とした博物館教育とは、知識の取得に時間や能力が必要な図書館のようなものではなく、一目見ただけで意味の多くを読み取ることができる百科事典のような教育だったのである。

またグードは、知識の普及と同様に知識の増大も重要だと捉えていた。(11)において、博物館は、研究者と一般大衆双方に活用してもらうことで学びの発展に寄与できると記していた。つまり、博物館資料をもとに研究者が得た知識を専門家だけに留めるのではなく、一般大衆にも伝えるという教育活動一連の流れを期待していたと考えられる。

グードは、急激に近代化が進む時代の中で、教養の有無に関わらずあらゆる人々を啓蒙する教育機関としての役割を博物館が担うことが望ましいと考えていた。勿論、この見解は、近代化の完了した現代の日本には当てはまらない。しかし、すべての人々に読解能力があり図書館を自由に使える現代でも、飛躍的な科学進歩や情報化などによる社会変化の著しい現代社会で生きていくためには、以前よりも高度な知識の取得が必須である。時代背景は変化したものの、当時を「忙しなく、批判的で、懐疑的な時代」⁽³⁷⁾と記したグードの表現と現代社会にはさほどの違いはないのではないだろうか。

第3点は、博物館の公共性に対する見解である。この見解は、ほとんどの論文で取り上げられており、それぞれ視点を変えながら繰り返し論じられている。(2)や(11)では、博物館は、来館者目線に立った展示設計を行うべきであると、スミソニアン年次報告書(1881年度)では、一般大衆のための百科事典のようになるべきだと説いている。また、(14)では、近代社会における博物館の必要性について詳しく論じられていた。グードの考える博物館の公共性とは、近代化社会において重要な役割を担うことであり、そのためには一般大衆を対象とした取り組みを強化することが不可欠だったのである。そして、この取り組みが上記の節において述べた「教育」だったのである。前述したように、グードの活躍した時期は、南北戦争終結後の劇的な変化が起こった時代であり、その社会背景を受けてアメリカの博物館は発展してきた。グードの考える博物館の公共性は、このような時代の流れを象徴するものである。

第4点は、ラベルの有用性についてである。今回詳しく取り上げたほとんどの論文で、ラベルの重要性について主張していた。スミソニアン年次報告書(1881年度)、(11)、(12)、(15)において繰り返し引用された「有能な教育博物館は良

「い展示ラベルのコレクションを持つ」という主張から、グードがラベルの活用を教育活動の要点と捉えていたことを窺い知ることができる。(15)の第9章の中で、グードはラベルを「一般公衆や講師、出版済みのハンドブックに対して、博物館の宝物を理解しやすくするための最も重要な方法」と記している。百科事典のような教育を目的としていたグードにとって、資料の情報を最も分かりやすく解説する技法がラベルだったのである。また、ラベルは何度も読み返すことができ、ガイドブックに載せれば自宅でも見ることができる。ラベルによる教育を採用することで、来館者は自分のペースで学習することができ、博物館外での再学習も可能となるのである。グードは、このような体験が博物館好きを育て、来館者に物事を総括的に捉える能力や全知の感覚を与えることができると考えていた⁽³⁸⁾。

以上、全体を通したグードの見解や主張を述べた。グードの論文は、博物館の概念といった抽象的な思想だけでなく、それに基づいた実践技術という具体性を持っていた。博物館が公共性を保つためには誰を対象とすべきか、教育機能を充実させるためには何に取り組むべきか、常に具体性を持って示してきた。グードの論文が広く欧米に普及した要因の一つは、実践の場で即座に役立つ博物館論を展開したことにあるのであろう。また、グードの博物館論は、現代から見れば時代遅れの部分があることは事実であるが⁽³⁹⁾、現代に通ずる理論や現在の博物館で当たり前となっている技術が多いこともまた明らかである。グードが繰り返し主張してきた博物館の公共性や教育の重要性は、現在でも頻繁に論じられる課題であり、その必要性を真っ向から否定する博物館学者はいないであろう。また、同じくグードが繰り返し論じていたラベルやガイドブックの活用方法、展示演出は、現在の博物館においてごく一般的に受容されている展示技術である。明確な方法論のない時代に、現代にも通用する理論や技術を体系的に纏めたグードは、非常に優れた先見の明を持っていたといえるであろう。

3. 博物館における実践の記録

具体的な理論を展開したグードの博物館論は、当時の現場に活かされていたのであろうか。年次報告書や写真のアーカイブスを用いながら、当時のスミソニアン⁽⁴⁰⁾の国立博物館で行われていた、グードの理論を反映したと思われる展示や教育活動について考察する。

ここで、スミソニアン⁽⁴¹⁾の国立博物館の設立背景について簡単にふれておきたい。1846年に設立されたスミソニアンは、当初から博物館を主要とした活動を行っていたわけではなかった。1835年、「アメリカ合衆国ワシントンの地に、人々への知識の増大と普及のためのスミソニアン協会という組織を設立すること」という遺言とともに、イギリス人のジェームズ・スミソンの遺産がアメリカ

国民に寄付された。アメリカ政府は、どのような施設をつくるのか10年以上にわたって議論を行い、研究所や博物館、図書館、科学実験室を含めた施設をつくることを決定したのである。しかし、初代長官であるジョセフ・ヘンリーは、スミソンからの遺産の大部分を科学研究のためだけに利用しようと考えていた。つまり、ヘンリーは、遺言の「知識の増大」をより重視したのである⁽⁴⁰⁾。しかし、国の探検調査によって得た資料や博覧会で収集したコレクションなど、資料の数が次第に増加していったため、新たな博物館の建設が不可欠になっていった。この頃の展示は、現在のスミソニアン協会本部の西ウィングに設置されていたのだが、十分な広さを持ち合わせていなかったのである。

ヘンリーの死後、ベアードが長官に就任すると、スミソニアンは博物館路線を一気に推進していく。ベアードは、すでに所蔵する莫大な数のコレクションと新規の資料を収蔵することのできる新たな建物の建設資金を支出するよう議会に取り付けたのである。そして、1881年、工芸産業館（Arts and Industries Building）が完成し、本格的な国立博物館の展示が行われた。したがって、ベアードは、スミソニアンの国立博物館の父と呼ばれるが、実際にこの博物館の基礎を築いたのはベアードの部下であるグードであった⁽⁴¹⁾。

3-1. 報告書や写真からみる当時の取り組み

図1は、1885年のスミソニアン年次報告書に記載された工芸産業館の平面図である。これを参照すると、中央に円形の大広間を置き、その四方にメインスペースである“Hall”を設置、その他のスペースに4つの“Court”、8つの“Range”と名付けられた展示スペースを設けていたことが分かる。また、一室ごとに「哺乳類」「鉱物」「民族」「水産」「造船」などの展示テーマが設定されている。グードは、この展示分類を一時的なものと記しており、その後たびたびの変更を重ねている。北西の“Range”の内一つは、レクチャー・ホールになっており、その隣に図書館や職員のオフィスが設けられている。

写真1は、「発明品の歴史概要：ナイフ、のこぎり、錐、へら」と題された展示ケースを1900年頃に撮影したものである。前述したように、グードの理想とする教育は、体系的で分かりやすい百科事典のような教育であった。写真1を見ると、「ナイフ」「のこぎり」「錐」「へら」とそれぞれのカテゴリーに区分され、左からそれら道具の発展していった様子が一目見て分かるようになっており、グードの教育観に基づいた展示を実践していたことが窺える。また、残念ながら文字は見えなかったが、左端に大きめのラベルが掲げられており、おそらく各々のカテゴリーについて解説したものであると思われる。これは、「組織と規定の計画」(6)に記されていた「概略などの大きくて分かりやすいラベルを設けること」を実践したものと推測される。

写真2は、工芸産業館の哺乳類の展示を1887年に撮影したものである。写真の

右側を見てみると、展示ケースの前に何冊かの本が乗った机と椅子が置かれている。これは、グードが「博物館経営の原則」(15)の第X章にて記している閲覧机であると考えられる。グードは、閲覧机について「来館者に分野の文献を示す基本的な参考著書や辞書、目録をそれぞれの展示室に一定の数置くべきである。また、それぞれのテーブルは、その場にあるコレクションが解説している分野を担当すること」と記している。この写真では、本の内容まで分からないが、おそらく哺乳類に関する参考図書であろう。来館者が疑問を抱いてから即座に利用することが可能な展示室内に閲覧机を設けていることから、「参考になる文献は、使いやすい場所に置いておかなければならない」というグードの見解を実践していたものと考えられる。

1890年代に撮影された写真3は、非常に混み合ったレクチャー・ホールの記録である。アーカイブスの詳細には、「ホール正面に置かれた熊の剥製とエスキモーの人形は、おそらく講習会のために使用されたもの」⁽⁴²⁾と記されている。また、スミソニアン年次報告書に、生物学や人類学関係の学会後援による講習会を定期的で開催していた記録が残っており、講習会が非常に盛況であった様子が報告されている⁽⁴³⁾。したがって、写真3は、講習会の様子を撮影したものと推測される。グードは、展示資料を解説する講習会の有用性について言及しており、最も効果的なのは特定の題材を扱う講習会であり、学校教師のようなグループに向けて講義した場合であると考えていた。これは、講習会における時間や人数の制限を考慮した見解であろう。写真の人々の職業は定かでないが、教育活動の一環として人気のある講習会を行っていたことが確認できる。

3-2. 「世界の縮図」を目指した展示

写真4は、1890年代の工芸産業館北の“Hall”に設置されていた「アメリカの歴史」の展示を撮影したものである。正面奥の円形広間に見える大きな彫刻は、議事堂にある「自由の像」の石膏模型である。通路の両側には、展示ケースが整然と並べられており、甲冑や民族衣装を来た人形、陶器、絵画、彫刻など様々な資料が展示されている。図1の1885年より展示室は改変され、1890年頃には西“Hall”に「技術」の展示、北“Hall”に「アメリカの歴史」の展示が設置されていた。つまり、中央の円形広間に立って、西と東を見れば文化と技術の展示があり、北と南を見れば自然史と歴史の展示があったのである。文化史だけでなく自然史のコレクションまでを一つの建物内で見ることのできた展示は、まさに「世界の縮図」であった⁽⁴⁴⁾。総合的な博物館を目指していたグードにとって、あらゆる分野の資料を展示した国立博物館は、「世界中で最も広範囲かつ教育的な博物館」だったのである。

しかし、写真4の展示を現在の展示と比較すると、展示室内の資料の数が明らかに過剰な状態と見受けられる。展示ケース内には所狭しと資料が並べられてお

り、収まりきらなかったと思われる資料がケースの上に資料が置かれている。前述したように、所蔵するコレクションすべてを展示するのが一般的であった時代の中で、国立博物館もその時代背景を反映していたものと考えられる。あらゆる分野の言葉について記述する百科事典のような博物館を目指していたグードにとっても、展示資料の取舍選択という考えはなかったのであろう。これ以降もスミソニアンのコレクションは増える一方で、グードがスミソニアンで働いた間にコレクションの数は当初の15倍にまで拡大している⁽⁴⁵⁾。結局、巨大なコレクションの管理をどうするのかという問題は、グードが亡くなった後の職員たちに任されることになったのである⁽⁴⁶⁾。また、アーカイブスにて当時の国立博物館の展示を見てみると写真1のようにいくつかの展示ではラベルを活用している様子が見られたが、写真4ではラベルの存在を確認することはできない。グードの博物館論を活かし設計された展示があった一方で、すべてにおいて、それを実践するまでは至らなかったようである。

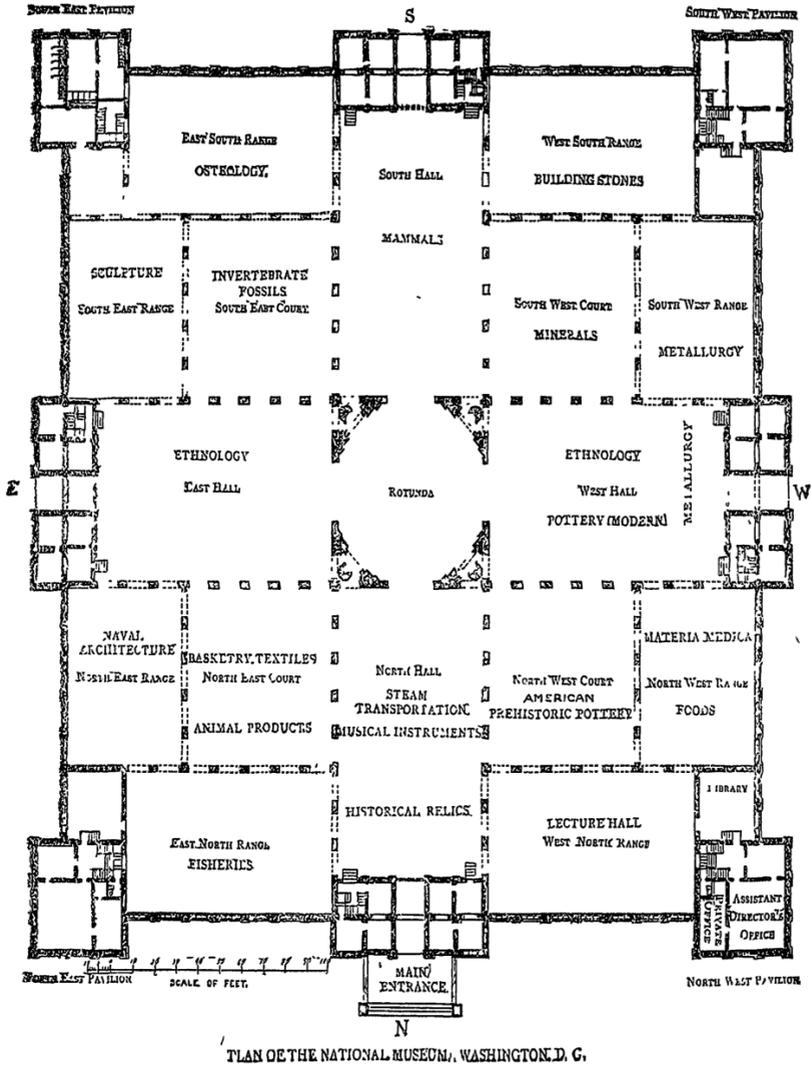


図 1 : 工業産業館の平面図 (1885年スミソニアン年次報告書より)

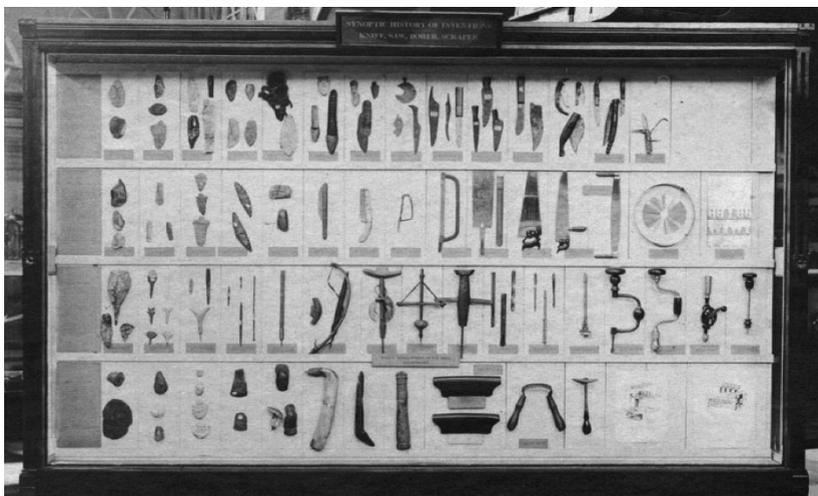


写真1：“Synoptic History of Inventions: Knife, Saw, Borer, Scraper exhibit case”
(Smithsonian Institution Archives Collectionより)

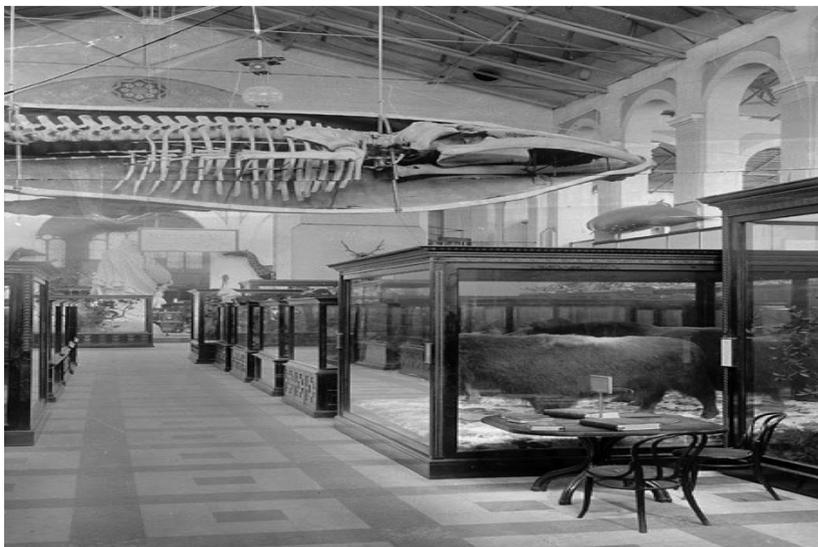


写真2：“Mammals Exhibit, U.S. National Museum Building”
(Smithsonian Institution Archives Collectionより)



写真3：“Crowded Lecture Hall”
(Smithsonian Institution Archives Collectionより)



写真4：“North Hall” (Smithsonian Institution Archives Collectionより)

まとめ

グードの博物館経営者としての業績に対する大きな評価点は、二つあると考えられる。

一つ目は、社会的ニーズを的確に捉えていた点である。グードの博物館論の特徴として最もよく挙げられるのは、教育を強調した点である。これまで述べてきた通り、グードが博物館の教育活動を重視し、積極的に展示ラベルなどの実践に取り組んできたことは明白である。グードが教育の重要性を主張した背景には、明確な根拠があったと考えられる。前述したように、当時のアメリカ社会は、様々な問題を抱えており、多様な言語・文化を持つ人々で溢れ、国民の間には国への不信感が募っていた。このような社会背景の中で、アメリカという国をつくりあげることは急務であり、人々が無知のまま満足な暮らしを維持することは難しくなっていた。つまり、当時のアメリカ国民たちは、国の言語や文化を学び、万物を知ることのできる教育の場を求めていたのである。しかし、近代化の最中であつた当該期、すべての人々に教養があるわけではなかったため、能力に制限のある図書館や子供のみを対象とした学校では、あらゆる人々に対応できなかった。そこで、グードは、聞く、読むよりはるかに容易な「見ること」によって大人から子供まで学ぶことのできる博物館に、国民の求める教育の場を見出したのである。当時の国民が必要としていた要点を的確に判断し、それを応用したことがグードの博物館経営者としての業績において大きく評価される点であると考えられる。

日本全国に様々な条件の博物館が5,000館以上も存在する現在、各々の博物館が生き残るためには、確固たる存在意義を示すことが必須となっている。その中でも公立博物館は、どのような目的を持って人々に奉仕するのかといった社会的役割の提示を求められている。公立博物館が永続的な活動権利を得るためには、グードが思考したような博物館が担うべき社会的ニーズを的確に判断する必要があるのではないだろうか。

二つ目の評価点は、思慮ある博物館論を展開した点である。グードは、当時のアメリカにおける博物館の発達について以下のように指摘していた⁽⁴⁷⁾。

博物館設立の活動は、時代とともに遅れをとっている。アメリカは、自国民の精神形成において非常に遅れており、イギリスやドイツ、フランス、イタリア、日本よりも進展に欠けている。素晴らしい博物館活動を行っている2、3の中心的な施設がアメリカに存在することは事実であるが、ここ20年の間に新しく設立された博物館はほとんどなく、古い博物館は活気を失っている。

と記し、世界各国からの遅れを危惧していた。それゆえ、ヨーロッパにおいて

発展してきた博物館の歴史を理解し、先人たちの考えから様々な知恵を学ぶことで、遅れをとっている自国の博物館発達に役立てようと試みたのである。そして、それらの知恵を参考にし、自国に適した考えを発展させ具体的な博物館論を導き出したことがもう一つの大きな評価点であると考えられる。一方で、その理論すべてを当時の国立博物館において実践できなかったことは残念な点である。それでも、今日の世界各国で一般的となった技術が多いことから、グードの博物館論は時間をかけて大成したといえるであろう。

グードが博物館を「生きた思想の育つ場所」と記し、「完成した博物館は死んだ博物館」と指摘したように、今日の博物館も成長し続ける「生き物」でなければならない。これまで述べてきたように、グードの博物館経営に関する意欲の高さや知恵の深さには目を見張るものがあった。グードが新しい理論や技術を積極的かつ実験的に取り入れていたように、「生き物」である博物館は、過去の知恵や失敗から多くを学びつつ、新しい経験を積んでいくことでさらに発展していくのではないだろうか。

註

*本文中で引用した英文文献の日本語訳は、すべて筆者による。

- (1) 倉田公裕1988『博物館の風景』六興出版 P.67
- (2) 棚橋は『博物館・美術館史』の中で特に詳しくグードの論文を取り上げているほか、『眼に訴へる教育機関』『博物館学綱要』『博物館』といった著書の欧米博物館発達史においてもグードの記述が見られる。
- (3) Alexander, Edward P, 1983 *Museum Masters: Their Museums and Their Influence*, The American Association for State and Local History, P.305
- (4) 松本栄寿1995「スミソニアン協会の科学技術の展示－米国歴史博物館の歴史的背景と現状の活動を中心に」『博物館学雑誌』第20巻 P.45
- (5) Jordan, David Starr, 1910 *Leading American Men of Science*, H. Holt, P.392
- (6) 註 (3) と同じ P.282
- (7) Wesleyan University HP
<http://www.wesleyan.edu/archprog/collections/background.html>
- (8) Lindsay, G. Carroll, 1965 “George Brown Goode” edited by Clifford L. Lord, *Keepers of the past*, University of North Carolina, P.127
- (9) Gill, Theodore, 1896 “George Brown Goode” *Science (new series)*, 4 (Friday, November 6), P.663
- (10) 1896 “George Brown Goode” *Science (new series)*, 4 (Friday, September 18), P.366
- (11) Schwarzer, Marjorie, 2006 *Riches, Rivals & Radicals: 100 years of Museums in America*, American Association of Museums, P.8
- (12) 註 (11) と同じ P.8
- (13) 註 (1) と同じ P. 60
- (14) 小山修三1981「アメリカの博物館史」樋口秀雄編『博物館学講座2日本と世界の博物館史』雄山閣 P.24
- (15) 註 (11) と同じ P.122
- (16) Walker, William S., 2013 *A Living Exhibition: the Smithsonian and the Transformation of the*

- Universal Museum*, University of Massachusetts, P5
- (17) Goode, George Brown, 1881 “Plan of Organization and Regulations” *Proceeding of U. S. National Museum*, Vol.IV (1882)
- (18) 註 (3) と同じ P.290
- (19) 註 (8) と同じ P.132
- (20) Goode, George Brown, 1883 “Report of Assistant Director of the U. S. National Museum for 1881” *Smithsonian Institution Annual Report for 1881*, Washington
- (21) Rydell, Robert W., 2006 “World Fairs and Museums” edited by Sharon Macdonald, *A Companion to Museum Studies*, Blackwell Pub, P.139
- (22) 註 (16) と同じ P.24
- (23) 註 (20) と同じ P.85
- (24) 註 (20) と同じ PP.85-87
- (25) Goode, George Brown, 1894 “Museum and Good Citizenship” *Public Opinion*, Volume X VII, Number 31
- (26) 註 (25) と同じ P.758
- (27) 矢島國雄2008「都市と博物館（序論）－20世紀アメリカ合衆国の博物館の変貌から」『明治大学人文科学研究所紀要』第63冊 P.272
- (28) Goode, George Brown, 1901 “Museum History and Museum of History” *A Memorial of George Brown Goode*, Washington
- (29) 註 (28) と同じ P.73
- (30) 註 (27) と同じ P.274
- (31) Goode, George Brown, 1901 “The Museum of the Future” *A Memorial of George Brown Goode*, Washington
- (32) 註 (31) と同じ P.243
- (33) 註 (1) や棚橋源太郎1957『博物館・美術館史』、谷津直秀1920『動物学講話』などに引用されている。
- (34) 註 (31) と同じ P.243, P.261
- (35) Goode, George Brown, 1901 “The Principles of Museum Administration” *A Memorial of George Brown Goode*, Washington
- (36) 日本の論文だと註 (27) や註 (41) 内で取り上げられている。
- (37) 註 (31) と同じ P.243
- (38) 註 (21) と同じ P.140
- (39) 註 (3) と同じ P.296
- (40) Kulik, Gary, 1989 “Designing the Past” edited by Warren Leon and Roy Rosenzweig, *History Museums in the U. S.*, University of Illinois, P.7
- (41) 高橋雄造2008『博物館の歴史』法政大学出版局 P.302
- (42) Smithsonian Institution Archives HP
http://siarchives.si.edu/collections/siris_sic_10240
- (43) Goode, George Brown, 1886 “Report of Assistant Director” *Smithsonian Institution Annual Report for 1885, Part 2; Report of the U. S. National Museum*, Washington, P.21
- (44) 註 (16) と同じ P.30
- (45) Oehser, Paul H., 1948 “George Brown Goode (1851-1896)” *Scientific Monthly*, 66, P.205
- (46) 註 (16) と同じ P.33
- (47) 註 (31) と同じ P.72